設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺

【講義】第九　佛說無量壽經卷上講義第九

釋深厲

第四十三會　設我得佛等　○第十二光明無量願。第十二十三の二願は淨影は攝法身の願と名く。憬興は求佛身の願と名けてあり。正しく彌陀の果上の佛身を。御成就なされる願と云ふことなり。とき上來辯ずる如く。四十八願法藏菩薩の放任の辯才にてのぶるに由て次第はなけれども。不次第の中に次第ありて。二の本願前後の次序歴然と分れてあり。最初無三惡趣の願より。この上の必至滅度の願までの次第は。これまで辯ずる通りなり。ときに必至滅度の願。次に彌陀の光明無量壽命無量の願あるは。一向不次第なるにあらずやといふに不爾。必至滅度の願の次ぎに。光壽無量の本願なければならぬ譯けあり。其わけと云ふは上の法藏菩薩の請說の言に「攝取佛國淸淨莊嚴乃至令我於世速成正覺拔諸生死勤苦之本」とあり。我れ佛土を成就して速かに正覺を成じ。諸の衆生の生死勤苦の本を拔きたいと。世王佛に申し上げ給ふ。今この四十八願の中。これより上の十一願は。攝取佛國淸淨莊嚴無量妙土の相を誓ふ。第一の無三惡趣の願に。三惡趣ある佛土を選び捨てて。三惡趣のなき淨土を選びとり。それより不更惡趣の願。悉皆金色の願。乃至次の第十一の本願に於て。我淨土に往生するものは。大涅槃の樂を與へたいと誓ふ。これこの上の十一願は。すべて諸佛の世界より畢竟安樂の淨土をば。選び取らせられた相たを誓ふ本願なり。ときにその畢竟安樂の淨土を選び取るは。何の爲めぞと云ふに。令我於世速成正覺の相たを誓ふが。この光壽無量の二願なり。それから拔諸生死勤苦之本と。一切の衆生をば安樂の淨土に往生せしめ給ふすがたを誓ふが。第十七の本願より末の本願なり。第十四の聲聞無數の願。第十五の眷屬長壽の願。第十六の離譏嫌名の願。この三願は十二十三の光壽無量の本願に收る。其譯けは段々辯じて行けば知れる。爾れば今ここは令我於世速成正覺と。彌陀と云ふ正覺を取ることを願ふ處ゆゑ。そこで光明無量壽命無量の本願。ここになければならぬことなり。とき全體彌陀の本願は利他大悲の願なり。衆生濟度が主なり。それゆゑ二の本願にみな不取正覺の誓の言あり。衆生の往生を先に立てて。次ぎに御自身の佛果を求め給ふ。今願文の次第その通りなり。近くこの上の十一願。この第十二十三の願との次第を窺ふべし。上の十一願に我國中の人天は。悉く大涅槃の佛になさふと誓ふ。それに就て衆生を無上涅槃に至らせるには。我も無上涅槃の佛にならねばならぬに依て。我も無上涅槃の佛果を得たいと願ふが。十二十三の本願なり。夫故にこの十二十三の二願は。實は上の十一願より開き出す本願なり。十方の衆生に無上大涅槃の大樂を與へたい。それを與へるに就て。我も佛になりてからと願ひ給ふがこれより下の本願ゆゑ。そこで概して云ふときは。初めの十六願はみな拔苦與樂の本願なり。ただ衆生の苦を拔て。衆生に淨土の樂を與へたいとある本願は初めの十六願なり。そこで初めの十六願を拔苦與樂分と名くるは。正しく拔苦與樂のすがたは。上の第十一の願迄に顯じ已りたれば。その十一の願より開き出す十二十三なり。その十二十三に付た十四十五十六の三願なり。ときに十二十三の本願は。十一より開き出す本願と云ふは。異譯の經に對映すれば明かなり。この經の光明無量壽命無量と云ふは。彌陀の菩提涅槃

の二轉依の妙果。初めに光明無量と云ふは。光明は智慧ゆゑこれは菩提の智果なり。又壽命無量と云ふは涅槃の果なり。先に發起序の大寂定の下にて法事讃を引て辯ず。彌陀の涅槃常住のすがたが壽命無量なり。爾れば光壽無量は彌陀の菩提涅槃の二果なり。ときに上の第十一願の異譯の如來會下九左に。卽ち十一願の成就の文に「皆悉究竟無上菩提到涅槃處」とあり。これ如來會にてみれば。次上の第十一の本願は。十方の衆生を我淨土に往生させて。無上菩提を究竟し涅槃處に至らしむる。菩提涅槃の二果を與へんとあるが十一願なり。夫故異譯の莊嚴經上八右に。此光明無量の本願の異譯の處には。あらゆる衆生を我淨土に生ぜしめて。無邊の光明を得せしめんと誓ふ。次の壽命の本願の異譯には。あらゆる衆生を我淨土に往生せしめて。命百千俱胝那由他劫ならしめんと誓ふてあり。莊嚴經にてみれば。彌陀の御自身の光壽無量ではなく。十方衆生を我淨土に往生させて。光壽無量ならしめんとある御誓なり。これ先きに莊嚴經との異譯の同異を辯ずる中の。異譯に似て願事全く別なる例と云ふが是なり。この經では彌陀の光壽を誓ふ。莊嚴經では衆生の光壽を誓ふ。これ翻譯の不同にて願事は別なり。さりながらこれもと梵文に。彌陀の御自身の光壽無量を誓ふ處に。衆生をしてこの光壽無量を得せしめんの義がある故。そこを取て翻譯するが莊嚴經なり。それからみればこの十二十三の光壽無量は全く衆生のためなり。上の第十一の本願にて衆生に菩提涅槃の二果を與へたいと誓ふが法藏の願意なり。けれども衆生に菩提涅槃の二果を與へるにはただは與へられぬ。佛の方に光壽無量を滿足して。佛の光壽無量を其の儘衆生に與へる處が。十一願の菩提涅槃の二果なるゆゑ。そこで十一願の次にこの十二十三の願あり。爾れば法藏の發願の元意より

云ふときは。この十二十三の二願は。十一願より開出する本願なり。ここらが早や願文を窺ふ處の肝要なことなり。斯樣に窺ふが卽吾祖の思召なるべし。其の故如何と云ふに。吾祖の廣文類の判釋。四法三願六法五願と明してあり。十七十一十八の三願を以て四法を建立する。その四法の中の證卷より眞佛土の卷を開き出して。眞佛土卷にて眞佛眞土を明す處にて。この十二十三の本願を標してあり。證卷より開き出す眞佛土卷と云ふことは。六要一九右に出たり。六卷の廣文類ゆゑ四法の上に眞佛土卷化身土卷とあれども。敎卷の最初の題には只敎行證文類とあり。六卷の文類を敎行證文類と名くるは如何と云ふに。證卷より眞佛土卷を開出して其眞佛土卷より。化身土を明すに依て。六卷の文類となる。總じて云ふときには。六卷丸ながら敎行證文類なり。爾ればこれ眞佛土卷は。全體證卷より開出するなり。その證卷の初めに十一願を標し。證卷より開き出す眞佛土卷に。この十二十三を標してあり。そこで四法を開て六法とするときは。十一十七十八の上にこの十二十三を加へるゆゑに。六法五願となる。これ吾祖の廣文類の御提撕なり。全體四法は衆生往生の因果なり。行と信とは衆生往生の因。證は衆生往生の果なり。その衆生往生の果の中より。佛の眞佛眞土を開くが廣文類の提撕なり。所化衆生の果の中より。能化の佛の眞土を開き出すことは。全體外に例のなきことなり。然るにそれは吾祖の私かと云ふに。今此經の說相を伺ふに。彌陀選擇の願意がその通りなり。極樂から出て來り給ふ彌陀の化身たる吾祖に非ずんば。御存知なきことなり。諸佛の本願と彌陀の本願とのちがひめがここなり。諸佛の本願は自ら佛になりたる後衆生を度し給ふ。そこで上求菩提淨佛國土と云ひて。御自身の佛身佛土を求むるが先きなり。彌陀の本願はそれとは異ふ。十方の衆生を安樂淨土に往生させて。菩提涅槃の二果を與へたい。そ

れに就いて光壽無量を誓ひ給ふ。このわけあるゆゑ彌陀の本願では。一切衆生を悉く我如く佛になされる。諸佛の本願では御自身は佛になり給ひても。衆生を己の如く佛になし給ふこと能はず。今彌陀の本願では彌陀と云ふ御自身の御さとりが。元と衆生が佛になるに就きての御自身のさとりゆゑ。そこで一切衆生悉く彌陀と等しき佛になして下さるる。ここが法藏比丘の誓願超世無上に攝取し。選擇五劫思惟の定中より出でて五劫思惟を其儘述べる本願ゆゑ。十一の次に十二十三の願あることより。光明有能限量と云ふからが既に誓の言なり。若し我が光明にかぎりが有るならば。正覺はとらじと誓ふ。百千億那由陀諸佛國と云ふは。上よりの例にて。數量を以て非數量を顯す言なり。十方無量の佛國と云ふことなり。爾ればこの願文に。若し我が果上の光明に限量ありて。十方無量の佛國を照すこと能はずんば。正覺をとらじと云ふ誓なり。總じて云ふときには。我果上の光明無量ならんと願ひ給ふなり。ときにこの願の光明は。常光か現起光かと云ふ古來の論あり。即ち望西の中にその論あり。常光とは佛の常にそなへ給ふ光明なり。現起光と云ふは佛の時により放つ光明なり。眉間より光明を放ちて。東方萬八千の世界を照す如きは現起光なり。ときにこの常光現起光と云ふことは。只應身佛の上にあることぢやと云ふ說あれども。爾らず。探玄記三初右に盧遮那佛報身の光明。一には常光。二に放光と分てあり。これ常に云ふ處の常光現起光なり。爾らばこの願の無量光は何れぞやと云ふに。これは望西鈔に云ふてある通り常光なり。彌陀の眞報身の果體に成就するの光明ゆゑ。正覺成就のときより盡未來際をかけて。暫くも間斷なく十方無量の佛國を照す。即ち盡十方無礙光の光明なり。爾らばこの十二の願の光明は。ただ十方世界を常に照し給ふばかりにて。攝取不捨の利益はこの願の成就には非ずやと云ふ。ときにこれ又古來

一箇の論なり。攝取不捨の利益はこの願の成就とし。或は第三十三の本願の觸光柔輭の成就なりとする論のあることなり。これは攝取不捨の利益は。ただこの願の成就とさだめるがよきなり。なぜなれば下の成就の文に十二光佛を說く。初めの三光の無量無邊無礙光と云ふが。正しくこの第十二の願の成就なり。この願文にあてるときは。願文に光明有能限量と云ふが無量光のすがたなり。次に下至不照百千億那由他諸佛國と云ふは。これは十方無量世界の邊りなく照さふとある無邊光のすがたなり。ものにさえられては邊りなく照すことはならぬ。障礙なきゆゑに邊り無く照される。爾れば十方世界を邊りなく照す處に。自ら無礙光の利益そなはることゆゑに。第十二の願のすがたを無量無邊無礙の三光にて成就す。この趣き下の文に至て具にしれる。ときにこの三光を觀經では。光明遍照十方世界等と說く。阿彌陀經では光明無量乃至號爲阿彌陀と說く。この三經を通申して論主は盡十方無礙光如來と云ふ佛名を立て給ふ。これは動かぬことなり。爾れば攝取不捨と云ふが直ちに無礙光のすがたなり。即ちこの第十二の願の成就なり。攝取してすてざれば阿彌陀と名け奉る。念佛の衆生を攝取してすてぬと云ふが。すでに彌陀報身の果體の利益なり。爾れば攝取不捨はこの願の成就と定むべし。又十二光の中の無對光より末の九光はこれは彌陀の光明の別德なり。下の三十三の願の觸光柔輭の利益は。即ち此第十二の本願の彌陀の光明の別德なり。下の成就の文にてみれば歡喜光の德なり。それを直に經文に心意柔輭歡喜踊躍と說く。彌陀の光明の別德は無量なれども。それを且らく一つ擧てみせるが第三十二の願なり。爾れば彌陀の光明は體は一なれども。體の上の德と別德とを別けるときは。攝取不捨は體の德。觸光柔輭はこの光明の別德と分るべし。

【甄解】第七　大無量壽經甄解第七

○第十二。光明無量。設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺。初。得名者。一。名得勝光明願。義寂二。名自身光無限願。法位玄一三。名光明遍照無數願。良源等今家名光明無量願。者本順願文。若依漢譯可言光明勝過願。次。明攝屬者。佛功德中有七。師說。前言八加三十三五。後言有六除此二謂十二十三十七十八十九二十三十三光明壽命尤居其初。即是唯佛自境界。彌陀以此爲攝物之張本。是謂方便法身別德。此之二願成。處即六字嘉號也。使衆生聞此號者良由諸佛咨嗟願力從此咨嗟方達第十八願海念佛成佛。若其衆生情習而不能入於此者。或入二十或入十九是方便之所由設也。從此方便而遂轉入第十八願。是以故亦在佛功德攝若依論主三願以成佛三業功德。平等智光爲意業功德。無量壽法身爲身業體名號說法音聲即口業功德乘此三業二願不虛作住持功德。即第十八願也。爲不速入此功德寶海者張十九二十願網。此亦爲成不虛作之方便耳。三十二願光明無量德用故異譯及成就文帶其德說。三十五願是念佛往生益相亦爲佛德。卷而收之唯是眞實四願。加之菩薩功德。必至滅度願師說爲國德以爲五願建立。又略攝之一第十八願爲本。如灣肥若約衆生自第十八而之十二十三。故曰信心爲本。若約佛自十二十三而之十七十八願。故曰光明壽命誓願爲大悲之本。今顯佛功德故十二十三爲先此意也。已上全承師說次願意者。上雖誓國德及菩薩德。而無佛德則無知所從。是以立方便法身願。二淨三嚴悉以眞實智慧無爲法身爲其體。故衆生得此爲滅度而神通無礙。國以入此。則無三惡趣即無量光明土。其使攝歸者何。謂十七十八是也。第十八願關涉光壽故無邊光明攝取衆生令住正定至滅度。實壽滅體三種莊嚴併是盡十方無礙光如來也。然一一誓願爲衆生以國土爲先。若約體德言之。以佛功德爲先。故龍樹先讚佛德次讚菩薩德。以之爲無量力功德可知。然眞實五願中光壽二願至要也。故今家以此二願立爲眞報佛土。廣本第五云。謹按眞佛土者。佛土者則是不可思議光如來。土者亦是無量光明土也。然則酬報大悲誓願故曰眞報佛土。既而有願即光明壽命之願是也等。次引因願成就經文。可見矣。唯信文意云。「コノ一如ヨリ法性法身カタチヲアラハシテ方便法身トマフス。ソノ御スカタニ法藏比丘トナリ給ヒテ。不可思議ノ四十八願ヲオコシアラハシタマフナリ。此誓願ノナカニ光明無量ノ本願。壽命無量ノ弘願ヲアラハシタマヘル御カタチヲ世親菩薩ハ盡十方無礙光如來トナツケタテマツリタマヘリ。コノ如來スナハチ誓願ノ業因ニムクヒタマヒテ報身如來トマフス。即チ阿彌陀如來トマフス。コノ報身ヨリ應化等ノ無量無數ノ身ヲアラハシテ微塵世界ニ無礙ノ智慧光ヲハナタシメタマフユヘニ。盡十方無礙光佛トマフス。光リノ御カタチニテイロモマシマサスカタチモマシマサス。スナハチ法性法身ニオナシクシテ無明ノ闇ヲハラヒ惡業ニサヘラレス。コノユヘニ無礙光ト申スナリ。無礙ハ有情ノ惡業煩惱ニサヘラレストナリ。シカレハ阿彌陀佛ハ光明ナリ。光明ハ智慧ノカタチナリト知ルヘシト。」一多證文亦同之。當知上成眞報佛土下光攝無礙。皆此願所成也。問。佛德無量。何唯以此二願爲眞報身之德耶。古人有四義。一選擇攝取義。二以少攝取義。三寂照互用義。四攝化爲要義。云云。會疏四(六十四)今按有四義。一大悲爲本故。二彰智斷二德故。三彰報身體用故。四德兼橫竪故。前三義如六要鈔第五。初左及班錄。後一義如六要鈔第五。初左可往檢矣。次參考諸譯。漢譯第十三願一九右體用合爲一願曰。令我光明勝於日月及諸佛之明百千萬倍照無數天下窈冥之所皆常大。

明。諸天人民蠕動之類見我光明莫不慈心作善。用也。觸光柔輭相。來生我國等。吳譯第二十四願大與漢譯同。但云我頂中光明是爲異耳。第十九誓壽命又第廿三誓伴光第廿一誓伴壽。唐譯與今經無異。於伴唯壽而已。沒伴光明。宋譯八右第十願說眷屬光明次說眷屬長壽闕主光壽。或會云。宋譯舉伴攝主。今謂。此二願是方便法身大悲之本。不舉此者義似有所闕。若依略攝應如漢魏唐譯爲耳。又如悲華經第二段明佛功德。就中唯誓光明攝壽德於其中亦沒伴德總不說之。願相雖略以光明彰佛功德者與正依相近。學者細心擇焉。師說論主舉光德攝壽德。亦此意也。文。光明有能限量等者。下至百千億是有限量何稱言無量。或云。上一世界下至百千億世界。或云。上從無量世界下至百千億。溪師取後義。依初義者有難故云云。今謂。二義中後義爲正順從多向少義故。謂上自不照不可說微塵世界下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺也。此乃翻顯上照不可說微塵數佛刹下照百千億那由他諸佛國之義。此願既成滿足盡十方無礙光明故名阿彌陀。卽無量光無邊光之義也。以此義故鸞師以世界海釋之。高祖曰盈滿於十方微塵刹土。銘文問。何故以百千億那由陀佛國爲下至之限耶。答。爲顯超過諸佛之義也。師說曰。按漢吳兩本俱言令我光明勝於日月諸佛光明百千萬倍等。準此思之。諸佛光明皆有限量而不能照百千億等刹。故今彌陀願超過此我光明如日月諸佛光明有限不照億百千等刹者不取正覺。此舉無量無邊及超日月以攝餘德。已上。此說甚佳矣。是對諸佛有限量顯超過之義。今按漢吳兩譯俱說諸佛光明皆所不及也。從初照七丈乃至六百萬里。從一佛國乃至照二百萬佛國諸佛光明所照皆如是也。阿彌陀佛頂中光明焰照千萬佛國。是頂光十倍說。今經至諸佛光明者從七尺至二三四五由旬。從一

佛刹至千佛世界倍之百億倍故。故言百千億。百千億佛國是一佛之化境故。以之爲下至之限以顯無量無邊。故次說無量無邊等可知矣。已言有能限量。反之則無有量無邊際。卽是不可思議光體德也。吳譯爲頂中光明者約別相。今明光明顯赫之體乃是總身光也。漢譯顯成文言項中光明者項背圓光歟。觀經說項有圓光故。亦是就別相。雖總別異義無妨。問。依大法炬陀羅尼經諸佛有二種光明。一謂常光。二謂放光。今所願正在何耶。答。是常光。故悲華經曰。常光照於無量無邊百千億那由他諸佛世界。願成文亦言無量無邊等。可準知。古德曰。常光一尋雖常非遍。別緣遍照雖遍非常。此佛光明卽不如是。經無量劫遍照十方。實是諸佛不共德也。憙心略記其常光放光但是色光也。更有心光。探玄記三云。佛光有二謂身光智光也。身光有二。一常光。二放光也。智光有二。一照機。二照法也。此中常光者謂圓明無礙無時不照也。放光者謂以光驚悟。有時而照現收隨宜。故或曰之現起光亦名神通光也。照機光者謂普應群品也。如量智照法光者謂眞俗雙鑒。如理智然身光智光各別論者非一乘圓佛光明。一乘圓佛光明色心不二。身智無礙。常光放光照機照法相卽相銷融自在也。佛體雖如此就說相非無差別。是以今此願文及成就文對諸佛有限量光明顯無量無邊光體。故知是身光而常光也。自佛體言之則卽身光身心不二身智無礙。故普能應群品照十方衆生無明暗微塵世界故無礙智慧光故曰無礙光如來。唯信文憙又曰。此如來光明也。光明智慧也。智慧光形也。智慧又無形曰不可思議光佛。此如來充滿十方微塵世界故曰無邊光佛等。一多證文此彰卽身光而智光。六要三末十二言心光者此非光分身想心想其體各別。只就義門。宜得其意。以佛慈悲攝受之心所照觸光名之心光。文色心不二以可知矣。問。下三十三願與此願何別。答。今明無量無邊光體。下明無

礙光用。問。佛攝取用何光明乎。有云。觸光柔輭是攝取光明也。日溪師曰。卽用此光明衆生歸信契佛體故不捨。益通下三十三。尅體攝取在第十八故云云。師說曰。此願光明涉入下第十八願方成攝取德用。今經明因攝取果攝在其中。觀經舉果攝取因攝取在其中。又可今經智門超踰諸佛爲本。觀經悲門攝諸衆生爲最。二經不同思而可知。問。壽德已誓伴壽光德何特主德乎。答。滯記曰。此經中有伴壽願而無眷屬光明願。雖然下文明佛光明竟次明眷屬光明。文云。若有衆生聞其光明乃至其然後得佛道時普爲十方諸佛菩薩歎其光明亦如今也。文。既有願成就理可有眷屬光明願。故吳宋兩譯並有伴光願。由此思之梵本原有此願而譯家省略乎。蓋以譯家省略恐有意歟。何者彌陀攝法身願中並誓光壽者本爲令諸衆生成就此光壽德也。故能化光壽願全爲所化光壽願則伴德卽從主德而成故主光壽外無有伴光壽。由此道理故合能所光明以爲一願不別開眷屬光明願而已。由此觀之。於其壽則開之。於其光則合者。譯家欲示伴德全從佛德而所成之深義影略互顯而已。

【合讚】上之本六十五右　○二攝法身願二。第十二光明無量。設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺。光明者卽常光而非現起光。故悲華經第三曰常光照於無量無邊百千億那由他諸佛世界。又舉身光而非是頂光故觀經云八萬四千相好光明。諸佛國者舉國令知光照無際。意在攝取念佛衆生爾。

設我得佛壽命有能限量下至百千億那由他劫者不取正覺。

昭和十三年二月十二日印刷
昭和十三年二月十六日發行

佛教大系完成會之印

【非賣品】

編纂者　佛教大系完成會
右代表者　佛教大系完成會　原子廣宣　東京市板橋區板橋町九丁目二二三一
發行兼印刷者　原子廣輾　東京市板橋區板橋町九丁目二二三一
印刷所　佛教大系印刷工場　東京市豐島區西巢鴨二丁目二七一二
發行所　佛教大系完成會　東京市板橋區板橋町九丁目二二三一　振替東京五五三五一番

終